

市民が考える 「公共施設再編計画」！

町田市の5カ年計画の公共施設再編計画について市民の意見を反映させるため活動する市民グループ、まだ未来の会の第9回学習会が、1月 21日午後2時から町田市民文学館で41名の参加により開催されました。

鶴川図書館の存続を求める請願、文学館の存続を求める請願、市民生活に根ざした「公共施設再編計画」の策定をもとめる請願の3つの請願が市議会で採択されたことの報告の後、“市民版公共施設再編計画シノプシス”について、代表の菌田碩也氏から提案されました。

（「シノプシス」とは、要約、あらすじという意味です。「市民版公共施設再編計画シノプシス」は、町田の図書館活動をすすめる会のホームページ ⇒ まだ未来の会 ⇒ 今までの学習会についてからダウンロードできます。）

誰もが住みたくなるまち—その条件は5つ。「やすらぎ」、「にぎわい」、「おちつき」「あんしん」、そして「ときめき」。このなかでなにを優先し、また、どんなふうに組み合わせてまちづくりをすすめていくか、まちをあげての合意形成が求められる。

基本となるコンセプトとして、**1) 基本的な生活圏を重視する** 徒歩通学を前提とした小学校区を単位として基本的な施設を整備すること。**2) 公共施設の「使いこなし」を徹底して追及する** **3) 市の財政全体の見直しと効率的な運用を図る** そのためには問題を指摘していく財務オンブズマンの仕組みを作る等市民のチェック体制をつくること。

具体的な方策としては、たたき台として、「学校をコミュニティの拠点」になど、きめ細かい施設を配置していくことが述べられました。

また、計画作りへの市民の参画として**自治基本条例の制定**などが挙げられました。全国369の自治体で制定されている自治基本条例は、市民参画の基礎となるもので、町田でもつくる必要があるという話は興味深いものでした。この後、これらの提案をもとに、討議がなされました。

「人口減の社会を支える働き手の若者を支える両輪がちゃんとあること」「農のある町が大事」「若者が参加できる状況をつくる」等いろいろな背景をもつ方々の意見が出されるなかで、若い参加者からは、「町田に住んでいても寝に帰っているようなもので市政は身近ではない。このような層を巻き込んでいく必要がある。ゼルビアファンの人たちも同じような会社員だろうし、夢を託しているのだろう。合意形成の仕組み作りがいる」と述べられました。



あかちゃんを連れて出席した人は、「成瀬在住で、近くの境川に調整池を造る計画がもちあがり、市民の合意がないまますすめられている。息子が育っていく世界は文学や芸術が失われていない世界であってほしい」と述べられたのが、印象に残りました。

また、弥生ヶ丘自治会で博物館存続の請願に関わった人から、2022年に博物館が閉館する話があり、「郷土博物館はいらないのか？」と市に聞いたところ、担当者は「学校にある文化財を時々展覧会に出せばいい」と答えたといいます。まったく情けない、未来を見ない視点ではないでしょうか。市は図書館、文学館存廃の方針を6月に出す計画であり、これからの意見募集や市民説明会で、市民が口を開くことが急務！だと思います。

今回の学習会では、市長候補2名と市議会議員5名(内1名は、市長候補)の参加があり、一緒に討議できたことは前進だったのではないのでしょうか。

(知恵の樹 No.220 より抜粋)